

地域間のつながりを示す道具の「しまくとうば」

— 恩納村のことばの特徴を道具の言語地図でながめてみよう —

恩納村史「言語編」専門委員 仲原 穰

暮らしのなかで使われなくなった道具は社会から消えていきます。1990年代まで使われていたワープロ専用機は見かけなくなりました。わずか30年でも道具の栄枯盛衰があるのですから、祖母や曾祖母の世代が育った戦前と現代を比べると非常に大きな変化があり、かつて普段使いであった道具も次第に姿を消しました。ガスや電気がなかった頃は、竈の熾火で火をおこし、薪をくべて調理し、夜になるとランプで明かりをとりました。網戸や扇風機やエアコンもないため、暑い夏は雨戸を開け、就寝時には虫よけのために蚊帳を吊って寝ました。水道もないため井戸から水桶に水を汲み、天秤棒で担いで水甕に溜めて使っていました。このような暮らしは戦前の恩納村をはじめ沖縄の日常の一コマであり、農業や漁業、建築や裁縫、防寒や暖房などの生活に欠かせない道具は傷んでくると修繕しながら人々に大切に使われました。恩納村立博物館にはそんな道具が展示されており、当時の生活を窺い知ることができます。

そして、我々の祖先が紡いできた琉球諸語の中

表1. 恩納村の語頭がパ行、ファ行、ハ行の単語例

	刃 は	火 ひ	蓋 ふた	包丁 ほうちよう	帆 は
恩納	パー	ピー	プタ	ポーチャー	プー
恩納以外	ファー/前兼久・伴泊 ハー/その他	フィー/谷茶・高着 前兼久・伴泊・山田 ビー/その他 ※ヒー・ピー/ 喜良垣	フタ/その他 フータ/真栄田	フォーチャー/ 安富祖 ホーチャー/その他 ホーチャ/伴泊	フー/ その他

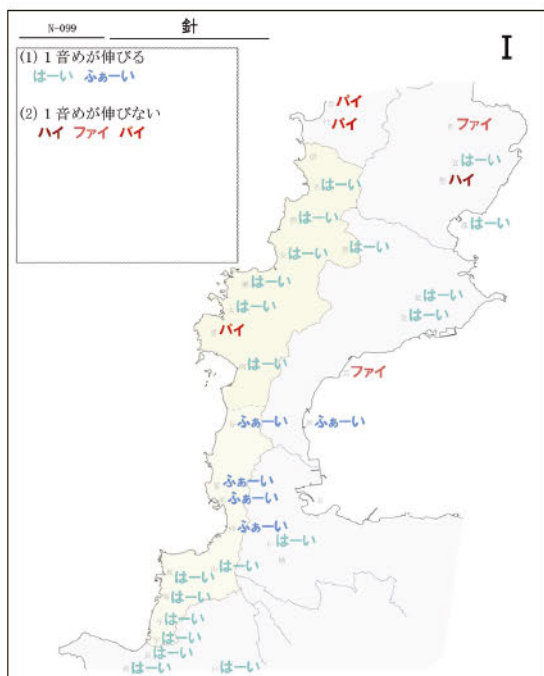


図1「針」の言語地図と針の写真

にはこうした道具を表すことばが数多く残されています。これらの単語は、地域ごとに特徴が見られ、人々の交流やつながりを感じさせてくれます。

道具を表す単語はカビ(紙)、ソー(竿)、クジ(釘)、ヌクジリ(鋸)、ポー(棒)、ナービ(鍋)、ニーフ(柄杓)、トーニ(豚のえさ箱)のように恩納村全域で同じ語形になる場合もありますが、集落の発音の特徴によつて異なる語形になる場合もあります。

例えばスク(アイゴの稚魚)のような魚を捕る際に用いられた「網」は、恩納村のほとんどの集落ではアミといいますが、恩納ではアーミーと発音されます。恩納村のなかで恩納だけが他の集落と異なる語形を用います。このように恩納だけが異なる語形になる単語を集めたものが表1です。

「は」「ひ」「ふた」「ほうちよう」「ほ」といずれも「は行」で始まる単語ですが、恩納村のうち、恩納だけがパ行で発音されています。パ行になるか、ファやハ行になるかの発音の違いは、沖縄本島中南部と北部のことばを区分する特徴の一つです。名護市や今帰仁村、本部町では恩納のようにパ行で発音される集落が多くあります。

表1と同様に「は行」で始まる「針」の言語地図(該当箇所)にその土